

所 陵

No. 78

[SENRYO/KANSAI UNIVERSITY MUSEUM REPORT]



● 目 次 ●

イノシシの牙製装飾品（縄文時代）

和歌山県小川八幡神社大般若経の調査	西本 昌弘	2
London「美術館」探訪記～National Galleryの「今」を見る～	池田 勝彦	4
顧客経験とミュージアム・マーケティング	馬場 一	8
京都鉄道博物館の概要と館内貸切について	廣田 琢也	10
南部靖之氏寄贈の兵馬俑（複製）について	施 燕	14

関西大学博物館

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3丁目3番35号

Tel. 06-6368-1171（直通） Fax. 06-6388-9928

<http://www.kansai-u.ac.jp/Museum/>

和歌山県小川八幡神社大般若経の調査

西 本 昌 弘

2018年7月26日（木）の午前8時前に小川八幡神社に到着し、毎年恒例の大般若経虫干し行事に参列した。東京大学史料編纂所の一般共同研究「和歌山県海草郡紀美野町小川八幡神社所蔵大般若経の研究」に竹中康彦氏（和歌山県立博物館）とともに所外共同研究員を委嘱され、所内研究員の山口英男・田島公両氏らと連れ立って現地に赴いたのである。



写真1 小川八幡神社

同神社では毎年7月26日、地区の人々が集まり、大般若経600帖の虫干し行事を行ってきた。当日は午前8時に神庫から大般若経の入った大箱を出し、神社の参集場まで運び下ろすことから始まる。その後、宮司・禰宜による修祓・降神・献饌・祝詞奏上など大般若経祭典と名づけられた儀式ののち、大箱の封を解き、大般若経を取り出して虫干しする。

折本になった大般若経600帖は12の大箱に各50帖ずつ収納されている。1つの大箱中に元禄製作の中箱があり、中箱中には応永製作の内箱が5段重ねで収められ、1つの内箱に各10帖が収納されている。虫干しは大箱・中箱中から内箱を出し、内箱からさらに1帖ずつ取り出し、折本を開きながら、空気を入れつつ、破損状態などを確認して行われる。そして最後に、「大般若経管理委員会」という方形朱印を捺した封紙を大箱に張ったのち、元の通り神庫に収め戻すのである。

小川八幡神社の大般若経は、1978年に関西大



写真2 大般若経祭典 祝詞奏上



写真3 大般若経虫干し

学文学部の蘭田香融氏の調査によって、その価値が広く知られるようになったもので、全600帖のうち120帖が奈良時代に遡る。そのうちの6帖には天平13年（741）～14年に紀伊国那賀郡の御毛寺（御気院とも記す）の知識が書写したことを示す奥書が書かれていた。この御毛寺は、『日本霊異記』に登場する「弥氣の山室堂」に相当する。すなわち、同書下巻第17 縁によると、紀伊国那賀郡弥氣里に村人たちが造った弥氣の山室堂（弥氣堂とも。法名は慈氏禅定堂）があった。弥勒菩薩の脇士の塑像は未完成で、臂手は折れて鐘楼に放置されていたが、宝亀2年（771）7月中旬の夜半、鐘楼から「痛きかな、痛きかな」とうなる声が聞こえてきたので、山室堂に常住する元興寺沙門の豊慶と同里の私度僧信行が知識を率いて塑像を完成させた。この御毛寺（弥氣の山室堂）は現在の和歌山市上三毛に所在する観音堂がこれに比定されている。

関西大学では藺田香融氏を中心に1983年～84年に原本調査を行い、1999年と2000年には補充調査を行ったが、私は藺田氏のお供をして后者の補充調査に参加し、2000年7月26日（水）に吉野集会所で行われた大般若経の虫干し行事に参列した。当時は僧侶二人が大般若経各巻を手にとり、「大般若波羅蜜多経巻第〇〇 三蔵法師玄奘奉詔訳」と首部だけを読み上げたのち、折本の経巻を勢いよく蛇腹状に開く、いわゆる転読の所作を行っていた。当地の大般若経虫干し行事では、かつてはこうした仏教行事としての転読が行われていたが、その後、事情によって転読の継承が困難となり、神社の方で現在のような祭典をとり行うことになったのである。



写真4 大般若経転読（2000年7月）

今回の調査では、虫干しの間に原本の一部を拝借し、奈良時代書写の経巻のうち、奥書に抹消部分があるものを中心に、目視で判読するとともに、赤外線カメラなどで撮影した。また、卷子本であった時代の各紙の寸法を計測することも行った。たとえば、巻第437の奥書は、次のように判読されている。

天平十三年歳次辛巳四月上旬、紀伊国奈我郡三氣■■■知識奉写大般若経一部六百巻
河内国和泉郡式部省位子坂本朝臣栗柄、仰願為四恩

「三氣」から「奉写」までの八字分は墨抹されているため、判読が困難であるが、わずかに残る墨痕などから、「三氣」、「知識奉写」の六字分が解読されている。残された二字分を解読するため、墨抹部分を障子越しに差し込む自然光にかざすなどして、何度か判読を試みたところ、問題の部分は、

三毛里之知識奉写

と読めるのではないかと考えた。紀伊国那賀郡



写真5 大般若経巻第437 奥書

に御氣里があったことは、『日本霊異記』下巻第17縁にも記されているので、三毛里の知識が大般若経を書写したとあるのは不自然ではない。ただし、この釈読はあくまでも私案であり、赤外線カメラで撮影したデータと照合する必要がある。

さて、虫干し行事が終了すると、参加した地区の人々には大般若経札が授与される。「奉転読大般若経六百巻守護攸」と印刷された長さ32cm、幅5cmほどの紙の経札で、これを各家の入口に貼り付け、1年間の家内安全・無病息災を祈念する。かつては笹竹に挿んで田の畔に立て、息災・豊作を願ったが、農家の減少にともない、この風習はすたれてきているという話であった。

18年ぶりに小川八幡神社の大般若経虫干し行事に参加して、行事内容の変わった部分と変わらない部分があることを興味深く思うとともに、年

に一度だけとはいえ、真夏の暑い盛りに早朝から神社や地区の人々が集まり、大般若経虫干し行事を長年にわたって守り伝えていることに頭の下がる思いがした。

【参考文献】

- 藺田香融「和歌山県小川旧庄五区共同保管大般若経について」（『古代史の研究』創刊号、1978年）。
- 藺田香融「小川八幡神社所蔵大般若経について」（『南紀寺社史料』関西大学出版部、2008年）。
- 竹中康彦「紀美野町に残る大般若経」（和歌山県立博物館編『特別展：中世の村をあるく：紀美野町の歴史と文化』、2011年）。

文学部教授

に御氣里があったことは、『日本霊異記』下巻第17縁にも記されているので、三毛里の知識が大般若経を書写したとあるのは不自然ではない。ただし、この釈読はあくまでも私案であり、赤外線カメラで撮影したデータと照合する必要がある。



写真6 大般若経札

London「美術館」探訪記

～ National Gallery の「今」を見る～

池 田 勝 彦

1. はじめに

博物館の紀要に「美術館」について寄稿するのがよいのかどうかについては悩んだが、著者はすでに、Londonにあるいくつかの博物館(大英博物館は恐ろしくて対象にしていないが)の探訪記については本誌に報告をさせていただいている。そこで、今回は「美術館」の探訪記にしてみようと思い至り、Londonにあまたある美術館の中から National Gallery を訪問することにした。

Londonには、表題にある National Gallery、それに隣接する National Portrait Gallery、Tate Britain、かつての火力発電所の建物を再利用した Tate Modern がある。National と Tate が、規模や展示物の価値からも London を代表する美術館であり、両美術館ともかつての大英帝国の威容を国の内外に示す役割を担っていることもあり、“Admission Free”であることから National Gallery の「今」を見ようと思った次第である。

2. National Gallery の位置するところ

さて、National Gallery の立地であるが、National Gallery は、かの有名なネルソン提督の像がある Trafalgar Square に面して建っている。Trafalgar Square は中央部が噴水となっており、ネルソン提督(図1)が立つ塔頭は、4匹の大きなライオンに囲まれる形でその隣にある。南側には Big Ben (改修工事をしているとの情報有)を眺めることができるポイントもある。いつ訪問しても工事中的エロス像(図2)のある Piccadilly Circus から、わりに近い場所である。観光にはうってつけの界隈である。また、交通の便もよい。この広場の最寄り駅は地下鉄の Charing Cross 駅で、Musical Theatre の多い Leicester Square 駅からも比較的近く、両 Tate と比べてもなかなかよい Location である。

3. National Gallery とは

National Gallery とは、イギリスの国立美術館



図1 トラファルガー広場に立つネルソン提督像



図2 囲いの中のエロス像、いつ工事が終わるのだろうか。

である。創設の経緯についても少し説明しておく。ただし、すべてはショップで買ったガイド・ブックの受け売りであることをお許しいただきたい。

National Gallery は1824年に設立され、1200～1900年代までの絵画を、2300点以上を保有している世界的レベルの美術館の一つである。パリのルーヴル美術館は1793年に設立され、スペインのプラド美術館は1785年に博物館の予定で設立され、1819年に開設されている。しかし、

そのころの「大英帝国」には、博物館としては British Museum はすでに設立されており、アンティークな美術・工芸品を収集していたが、絵画を中心とした美術館は欠けていた。Gallery の設立の出資者たちは「大英帝国」にも由緒あるマスターピースを常設する世界的な美術館を渴望するとともに、国家の威信でもあったと考えていた。さらに、出資者たちは次のように信じていた。この美術館の建設は過去の偉大な美術品が若手の芸術家を奮起・鼓舞し、学習のための上質の例となる。さらに、このような機会を与えなければ会うことがない人々に気安く上質の「文化」を与えられることができる。

ガイド・ブックの内容であるので、すべてを鵜呑みにできないかもしれないが、「英国」=「啓蒙思想」の流れにあるように思える。未開人に見せてやるぞとのスタンスは気に障るが「入場無料」はやはり魅力的ではある（館内には寄付金用の透明のボックスが用意されている）。

また、館内には、お土産ものの販売店だけでなく、カフェ・レストランも充実している。このカフェはイギリス伝統の English Breakfast の美味しい有名店の一つにあげられるほどだというから本格的である。休憩がてら立ち寄るのも一興だろう。

4. 展示室の様子やいかに

私個人の習慣ではあるが、私が美術館で取るお決まりの行動パターンがある。美術館を訪れる際の私の解釈は、あくまで「絵を見ること」が目的であると考えているため、まずは、“速読的な”速さで、できるだけすべての絵・彫刻等を見ることにしている。この段階では、説明文等はほとんど見ないで進む。よって、かなりの早さですべての展示を見終えることができる。しかし National Gallery のような大規模な美術館になると、そうもいかない。そこで、すべてを見て全体を把握することは無理なので、あまり欲張らず、何回も足を運ぶことを前提にして、全体をいくつかに分け、その一部分を見ることにしている。見る順としては、展示品の中の比較的新しいものから古いものへと進めていくことにしている。このような見方をしているのだが、今回の National Gallery 訪問は二十数回目となるので、さすがに時代を問わず隅々まで見

ることができているはずである。しかし、不思議にも訪れるたびに何かしら新しい展示品に出会うように感じるのは、展示品の豊かさゆえんだと感じ、面白い。

（１）ソファとロープ、そしてガラスケースが無いということ

さて、いよいよ入館である。ややもすると入館ゲート付近の展示品に目を奪われがちであるが、今回も事前に考えていた目的のエリア（今年は1800～1900年代の展示群である）に向かい、小走りよりもさらに速めの速度でそのエリアの展示品をすべて見まわった後で、見たいと思う展示品を決めた。その絵画作品をじっくり見るために、ソファに陣取った。これもいつもの習慣である。そしてその作品を見ながら同時に、つい、展示物を見ている人たちも観察してしまう。それがなかなか面白いのである。例えば、そこまで近づくかというほどに作品に接近し、熱心に筆運びを観察している人がいるかと思えば、一方で、作品を見るよりも解説ばかり読んだり、その作品の写真をとってばかりだったり、その作品を見ている人をながめてばかりの人もいる。実に様々なのである。

このような多様な作品の鑑賞のしかたが可能なのは、この Gallery の館内には、作品と入場者を隔てるものがほとんどないからであろう。あるのはせいぜい大人の膝の高さ程度のロープのみなのである（図3）。それ以外何の障害物もなく、これだけである。したがって、かなり近づくことができるので、筆遣いやそのタッチまでも観察可能である。例えば National Gallery 所蔵の有名な作品であるピカソの“Motherhood”（1901年）を図4に示す。ピカソは母子像を多く描いており、そのなかの一つである。このピカソに関する解説は筆者の能力を超えているので省略することをお許し願いたい、ここで確認していただきたいのは、このような世界的な名作であっても、防御するガラスケース等が無いという点である（一部の作品はガラスケースに入っているが）。

名画と呼ばれる作品は、往々にして額にガラスが入っていたり、そうでなくともガラスの陳列ケースにおさめられていたり…。これが一般的な美術館で見る光景である。たしかに、展示品を手の触れる状況で置けないものももちろん



図3 1800～1900年代の作品の展示室、ロープのみで保護している。

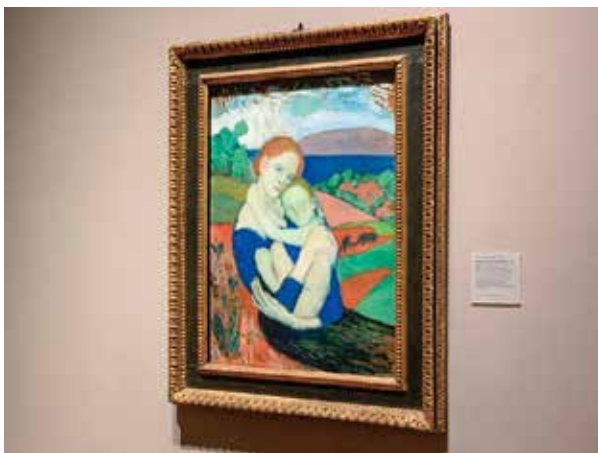


図4 ピカソの“Motherhood”、ガラスが無い

あるので、その場合、陳列ケースに入れるのは納得するが、絵画はそれでは困らないだろうか。照明が作品の表面を覆うガラスに映り込んだり、見ている当人の顔が映ったりということはよくあることだ。

これは絵を見ることの致命的な障害ではないだろうか。多くの美術館でガラスに入った名画に出会うが（今夏訪れたオルセー美術館でさえそうだった）、これは改善すべき点であると思うが、いかがだろうか。

このような、各フロアに作品鑑賞のためにゆったりとしたソファが置かれていることや、シンプル極まりない作品の前に設えられたロープの囲い、ガラスを介さずに作品を見ることができ館内環境を見るにつけ、この美術館が若き芸術家のみならず芸術を愉しむことのできる子どもたちを育てるという目的を明確に持っている美術館であると感じる。かしこまらずに芸術作品を間近に見ることができる。これほどまで

に、芸術に慣れ親しむことができる環境は少ないだろう。また、許可を得さえすれば、作品の模写が館内の作品の前でできることから明確である。これまで何度も訪問する中で、時折、模写をしている若者を見かけることがある。美術を専攻する学生であろうか。また、小学校の児童が床に座り、引率の先生や Gallery のスタッフの話を聞いたり、作品を模写したりしている姿に出会うこともある。思い巡らせてみると、このようなワークショップ的な活動は美術だけでなく、音楽の分野でも活発である。例えば、バービカン・センターをレジデンスとするロンドン交響楽団（LSO）では、子どもたちに思い思いの楽器を持ってきてもらって LSO と一緒に演奏するファミリーコンサートや、ロイヤルフェスティバルホールをレジデンスとするオーケストラの団員による青少年向けの多種多様なワークショップが行われている。もちろん、大英博物館においても多くの子ども向けのワークショップは開催されている。これらのことから考えると、イギリスの芸術文化に関わる施設は、芸術文化を身近なものとして嗜める素養を涵養することを使命として、至極当たり前に受け止め活動をしていることを感じる。2018年夏に久しぶりに訪れたルーヴル美術館は、人・人・人であふれかえり混沌としていた……。

（2）作品は自然光で

National Gallery 館内の照明は、「自然光」を取り入れることに重きをおいている（図5）。ただ、イギリス、特に London は曇りの多いお国柄ではあるので、照明機器の併設は不可欠である。それらは天井に一見無造作に取り付けられている（図5）。

しかし、無造作には見えるが、空間すべてをこうこうと照らすのではなく絵にのみ照明が当たるように配慮されている（図5）。ただ、すべてにおいてその配慮がいきわたっているというわけではない。例えば、図6では、モネの「睡蓮の池」の左隣に上下2段の形で展示されている2点の作品である。照明がぎりぎりではあるがうまく当たっていないように見える。この上下2段の作品の下の方の作品は「ウエストミンスター協のテムズ」という作品であり、ロンドンに由緒ある作品であることを考えると、この状況は少々、惜しいようにも思える。



図5 展示場の天井と照明



図6 図5と同展示場の照明状況、上下2段組の絵画で照明の影

(3) お気に入りに出会えず

私の National Gallery におけるお気に入りの作品は、“The Execution of Lady Jane Grey” (<https://www.nationalgallery.org.uk/paintings/paul-delaroche-the-execution-of-lady-jane-grey>) である。私にとっては、とても「綺麗な絵」だと感じる作品であるのだが、周囲からは、ホラー好きが高じたものだと思われる作品である。訪れるたびに、目的とするエリアをまわった後、必ずゆったりと見るようにしていた。ましてや今回は、National Gallery 訪問の目的が、本稿執筆のためであったこともあり、このお気に入りの作品について何か書ければと、いつも以上に鑑賞することを楽しみにしていた。しかし、記憶を頼りに館内を探しまわったが、このお気に入りの作品が一向に見つからない。約1時間探し回ったが見つからないので、英語力の問題から気が進まなかったのではあるが、館内のスタッフに思い切って尋ねてみた。すると、

JAPAN か USA に移転されてしまい、現在は館内に無いとのことであった。非常に残念であった。後でその作品の行き先について調べてみたところ、アメリカ・ヒューストンの美術館で展示されていることが分かった。スタッフの説明から受けた印象では「もう戻ってこない」というものであったので少々気掛かりである。ほかの貸し出し中の作品の場合は、その作品が飾られていた場所に「貸し出し中」の掲示があった。しかし、私のお気に入りの作品は、展示場所自体に別の絵がかかっており、もちろん「貸し出し中」の掲示もなかった。これには、かなり寂しい思いをしながら帰途についた。

なお、この私のお気に入りであるこの作品は、中村京子氏の『怖い絵』という本に取り上げられ有名になった「絵」でもある。ただ、作品としての評価はあまり良いとは言えず、技巧の勝った作品であり、それ以上でもそれ以下でもないとのことなので、ひょっとしたら手放すに至ったのであろうか。

6. まとめにかえて

今回は、LondonのNational Galleryについて、筆者の心にうつる個人的な思いにまかせて書かせていただいた。関西大学博物館の阡陵に相応しい内容かどうかはかなり疑問であるが、この原稿を読んでいただいた方の中から、National Gallery に行ってみようかなと思われる方がお一人でもおられれば、筆者の目的とするところは達成である。

National Gallery はれっきとした英国立の美術館ではあるが、比較的規模の小さいこぢんまりとした美術館であるので、大英博物館やフランスのルーヴル美術館のように、「時間が足りない」と焦りつつ慌しく見まわることはない美術館である。Londonを訪れる際には是非とも足をのばしていただければと思う。

なお、National Gallery 以外の美術館としては、英国を代表する巨匠ターナーの作品が多く展示されている Tate Britain と現代美術を積極的に展示する Tate Modern があり、こちらに関しても入場無料であるので、お勧めしたい美術館である。

博物館運営委員 化学生命工学部教授

顧客経験とミュージアム・マーケティング

馬 場 一

1 ミュージアム・マーケティング

ロンドンのヴィクトリア・アンド・アルバート博物館によるとミュージアム・マーケティング (museum marketing) は、「来館者のニーズとウォンツを識別し、彼らの経験を充足ないし強化する便益を提供するプロセス」を意味する。これを学術誌のデータベースで検索してみると Robins and Robins (1981) が最も古いようである。この論文では、博物館経営にマーケティングの手法（具体的には市場細分化）を応用して来館者を分析している。

より包括的にマーケティングの手法を博物館経営に応用したのは Kotler, Kotler and Kotler (1998) である。この書籍は、世界で最も著名なマーケティング研究者のフィリップ・コトラーと元スミソニアン・インスティテューションのニール・コトラーらによって執筆されている。2016年には『ジャーナル・オブ・マーケティング・マネジメント』誌が博物館と遺産のマーケティング管理に関する特集号を出している。

2 経営から経験へ

1980年代から今日に至るまでにミュージアム・マーケティングの問題意識は大きく変容してきた。それは、経営から経験へと表現できるだろう。かつて、イギリスの博物館をマーケティング革命が席卷した (McLean 1995参照)。博物館の目的である収集物の保護と保存だけではなく、独自収入の確保と公共へのサービスが強制ないし推奨された。そこで、導入されたのがマーケティングである。まず、顧客志向を経営理念の中心に据えることが博物館に求められる。次に、市場を細分化して、どの顧客を標的とし、そして、顧客の心に博物館のブランドを植え込む (ポジショニング) ための戦略が科学的手法を用いて策定される。そして、博物館のマーケティング・ミックス (製品・サービス、価格、チャネル、広告) の意思決定が行われる。こうした一連の取り組みは、今日では多くの博

物館で行われている。例えば世界最大の博物館であるスミソニアン博物館では、館全体に責任を有する役員室の直轄で、コミュニケーション・アンド・マーケティング室が置かれている。日本では、1995年に日本ミュージアム・マネジメント学会が設立されている。

ミュージアム・マーケティングの焦点は、こうした経営問題だけではなく、今日の消費を考える上で重要な「顧客経験 (customer experience)」へと移行してきた。冒頭の定義はまさにこうした流れを反映している。モノやサービスの所有や使用を通じた欲求の充足だけではなく、いかに顧客経験を向上させるかが今日の企業経営にとって重要な視角である。博物館にとっても顧客経験こそが決定的に重要となっている。

3 顧客経験とカスタマー・ジャーニー

顧客経験は、「顧客の購買の旅すべての間における、企業の提供物に対する顧客の認知的、感情的、行動的、感覚的、社会的反応」(Lemon and Verhoef 2016, p. 71) と定義される。この定義では、顧客が購買を繰り返すプロセスを旅 (カスタマー・ジャーニー) になぞらえている。

図1は、Lemon and Verhoef (2016) が提示したモデルである。顧客経験は、過去、現在、未来に分けられる。購買が連鎖することで現在の意思決定がなされる。現在の顧客経験を見てみると、さらに購買前、購買、購買後の3段階に区分される。各段階にはタッチポイント (TP) が存在する。ブランド所有 TP、パートナー所有 TP、顧客所有 TP、社会・外部 TP は、それぞれの TP の主体を表している。例えば、ブランド所有 TP は、企業によって設計・管理される経験を表す (例えば、メディアやマーケティング・ミックス)。逆に、顧客所有 TP は、企業やパートナーから独立した顧客の行為である (例えば、顧客の思考)。各段階における顧客の行動は異なる (ニーズ認知から使用まで)。カスタマー・ジャーニーの中で顧客経験を把握・

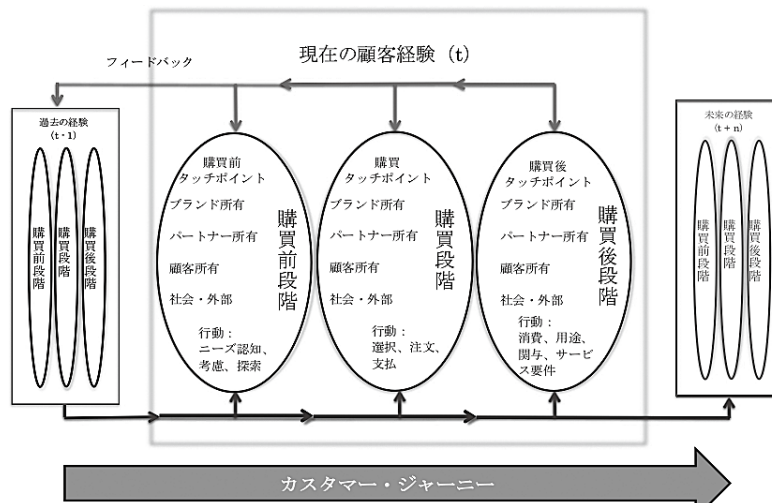


図1 プロセス・モデル

活用するためのポイントは以下の2点である。

● 顧客体験の測定

購買の各段階、そして、それぞれの TP における顧客体験を測定し、理解することが必要である。ペルソナを用いたマッピングは有用な方法である。

● 顧客体験の管理

測定された顧客体験をもとに管理を行う。特に、それぞれの TP において顧客体験をいかにデザインするかを組織内およびパートナーと考える必要がある。

4 来館者との価値共創

博物館来館者の顧客体験を強化するために着目すべきは価値共創 (value co-creation) という考え方である。これは、来館者のために価値を創出し、博物館のための価値を把握することを意味する。博物館の来館者と博物館のインタラクション (例えば、展示の共同制作) は、来館者の博物館へのロイヤルティや愛着を高める。

では、博物館における価値共創はいかに行われるのであろうか。博物館の文脈で Thynea and Hede (2016) は、正当性 (authenticity) を手掛かりにこれを検討している。博物館は、展示物が本物かどうかを意味する指標的正当性に焦点を当ててきた。しかし、博物館が本物ではなく、レプリカを展示しているとしても、対象との類似性があれば象徴的正当性が存在する。今日の博物館の正当性は、単なる指標的正当性だけではなく、象徴的正当性によっても構

成される。こうした来館者の正当性は、博物館の活動への積極的な参加によって形成される。

ミュージアム・マーケティングの今日の特徴は次のように要約できるだろう。第一に、博物館は、来館者との関係性を一回限りの取引と考えるのではなく、カスタマー・ジャーニーのなかでとらえる必要がある。第二に、購買前、購買時点、購買後の TP をいかに測定および管理するかはミュージアム・マーケティングの要点である。第三に、TP の設計は、来館者と博物館の価値共創を通じて生じる顧客体験が、認知的ないし行動的な側面のみならず、感覚的かつ感情的な側面を強化するようになされねばならない。

参考文献

- Kotler, N., P. Kotler and W. Kotler (1998), *Museum Strategy and Marketing: Designing Missions, Building Audiences, Generating Revenue and Resources*, John Wiley & Sons.
- Lemon and Verhoef (2016), "Understanding Customer Experience Throughout the Customer Journey," *Journal of Marketing*, 80, 60-96.
- McLean, F. (1995), "A Marketing Revolution in Museums?" *Journal of Marketing Management*, 11, 601-6.
- Robins, J. and S. Robins (1981), "Museum Marketing: Identification of High, Moderate, and Low Attendee Segments," *Journal of the Academy of Marketing Science*, 9 (1), 66-76.
- Thynea, M. and Anne-Marie Hede (2016), "Approaches to Managing Co-production for the Co-creation of Value in a Museum Setting: When Authenticity Matters," *Journal of Marketing Management*, 32(15-16), 1478-1493.

博物館運営委員 商学部准教授

京都鉄道博物館の概要と館内貸切について

廣 田 琢 也

1 はじめに

京都鉄道博物館は「地域と歩む鉄道文化拠点」を基本コンセプトに掲げて、2016（平成28）年4月に開館した、鉄道に特化した博物館である。筆者は当館が開館してから現在まで、途中一年間の出向期間も含めて当館の職員として勤務している。

今回は京都鉄道博物館の概要と、そこで模索している当館の館内貸切の活用法について紹介したいと思う。



写真1 エントランスホールの外観

2 京都鉄道博物館について

（1）概要

当館は京都市内の南方、下京区に位置している。京都駅からおよそ1.5キロ西方の梅小路公園の中にあり、京都駅からはバスで約10分、徒歩で約20分程度の場所である。京都駅と東海道本線（JR 京都線）の西大路駅、山陰本線（JR 嵯峨野線）の丹波口駅とを結ぶ三角地帯の中心地点で、2019（平成31）年3月には当館のすぐ近くに、JR 嵯峨野線の新駅である梅小路京都西駅が開業する。京都駅からの公共交通アクセスはバスによって確保されているが、今後は鉄道によるアクセスの整備で来館者数増が期待される。

開業初年度にご来館いただいたお客様は約141万人で、2018（平成30）年11月には通算300万人目のお客様をお迎えするなど、既に多くのお客様にご来館いただいている。

（2）博物館の前身

当館には前身となる博物館が二つある。一つ

は「交通科学博物館」で、大阪環状線弁天町駅の高架下にあった。鉄道以外にも航空機、自動車など交通機関に関する資料を収集、展示する施設で、1962（昭和37）年に「交通科学館」として開業し、2014（平成26）年に閉館している。

もう一つは「梅小路蒸気機関車館」で、現在当館がある場所に1972（昭和47）年に開館した。日本国有鉄道（国鉄）が使用していた扇形車庫を展示施設に転用し、開館当時消滅しかかっていた蒸気機関車を保存するための施設としたものである。全国でも数少ない、蒸気機関車専門の博物館であったが、2015（平成27）年に閉館した。

両館が収集した資料と、開業に際し新たに収集した資料とで当館の展示は成立している。

（3）展示施設

館内の展示施設は、メインの建物である「本館」、エントランスと本館をつなぐ実物車両展示「プロムナード」「トワイライトプラザ」、実物の蒸気機関車の動態・静態展示を行う「扇形車庫」、蒸気機関車の歴史を解説する「旧二条駅舎」と大きく分けて5つあり、それぞれで特徴を持たせた展示を行っている。

a 「本館」

「本館」は鉄道の仕組みや歴史等を解説する主たる施設である。入口を抜けるとすぐに、2016年に重要文化財に指定された蒸気機関車「233号機関車」（写真2）や、広告宣伝物のキービジュアルとしてご覧いただく機会も多い3両の実物車両「500系新幹線電車」「581系特急形電車」「489系特急形電車」が出迎える（写真3）。

1階の主な展示内容は、鉄道の誕生から現在までの歴史を紹介するものや、車両、信号設備、踏切、集電装置、台車など、鉄道にまつわる実物を多く展示し鉄道の仕組みを紹介するものである。また南側にはJR西日本の営業路線とつながる線路が敷かれた場所を設け、実際に走行している車両を搬入・展示できるようにしてい

る（写真4）。2階は、運転シミュレーターや駅の今昔を比較できる体験型の展示をはじめ、模型の鉄道車両が駆け抜ける鉄道ジオラマや、関西の鉄道、貨物輸送システムを紹介する展示があり、また企画展などを開催する企画展示室（写真5）もある。3階は東海道本線や山陰本線を走る列車を眺められる「スカイテラス」の他、資料室やホール等がある。



写真2 蒸気機関車「233号機関車」
(重要文化財)



写真3 本館



写真4 本館で展示される JR 西日本の
現役車両



写真5 企画展示室

b 「プロムナード」

「プロムナード」は展示場自体を駅のプラットフォームに見立て、実物車両12両を間近で見学できるようにしている。この12両の中には、初の長距離用電車「80系」（写真6中央の車両）や、皇室・貴賓客用客車「マロネフ59形」など、国内でも当館でのみ保存している車両が含まれている。



写真6 プロムナード

c 「トワイライトプラザ」

「トワイライトプラザ」も「プロムナード」と同様にプラットフォームを彷彿とさせる造りとなっている。メインの展示車両は1989(平成元)年に登場し、2016年に引退した寝台特急「トワイライトエクスプレス」の車両で、大阪－青森間をけん引した電気機関車「EF81形」や、「ダイナープレヤデス」と呼ばれ、車内に厨房を備えて料理を提供した食堂車「スシ24形」、高い人気を誇った2人用A個室寝台「スイート」を設けた寝台車「スロネフ25形」を、列車に見立て一列に展示している。他にも寝台客車1両と電気機関車2両を展示している。



写真7 トワイライトプラザ

d 「扇形車庫」

「扇形車庫」は、1914（大正3）年に建設された、扇を広げたような形の車庫である。京都駅を発着する列車をけん引する機関車の留置の他、機関車の修繕を行う工場として使用された。国

内に現存する最古の鉄筋コンクリート造の機関車庫として、重要文化財に指定されている。

蒸気機関車の車庫として今日に至るまで活用している他、工場機能も現存しており、2015年に当館と併設して建設された「SL 第2 検修庫」と呼ばれる施設と合わせて、蒸気機関車の動態保存を続けている。



写真8 重要文化財の扇形車庫
(写真奥に広がるグレーの建物)



写真9 SL 第2 検修庫内で展示される
C57形1号機(※庫内は通常立入不可)

e 「旧二条駅舎」

「旧二条駅舎」は、かつて京都と舞鶴を結ぶ鉄道の建設を目指すために設立された私鉄「京都鉄道」の二条駅の駅舎と本社社屋として、1904（明治37）年に建てられた。国有化後は山陰本線二条駅の駅舎として使用されていたが、同駅がJR 西日本に引き継がれた後、駅付近の高架化に際して「梅小路蒸気機関車館」へ移設、



写真10 旧二条駅舎

蒸気機関車の歴史や部品などを紹介する展示スペースとして使用された。当館の開業後は、展示スペースの大半はそのまま残しつつ、一部をミュージアムショップとして使用している。

（4）実物車両の展示

当館では53両の実物車両を保存・展示している。内訳は蒸気機関車23両、ディーゼル機関車2両、電気機関車5両、客車9両、貨車2両、気動車1両、電車5両、新幹線電車6両と多種多様だ。特に蒸気機関車は全体の約半数を占めており、それを目当てに来館するお客様も少なくない。23両のうち8両の蒸気機関車は現在でも走行可能な動態保存機で、さらにこのうち2両は当館の敷地から外へ出て、JR 西日本の営業路線を走行できる状態を維持している。

また館内では、実際に蒸気機関車がけん引する客車に体験乗車することができる「SL スチーム号」を毎日運行している。蒸気機関車を毎日運行させているのは全国的に見てもあまり例がない。



写真11 「SL スチーム号」をけん引する8620形8630号機（左）と展示中の7100形7105号機「義経」共に動態保存機であり、「義経」は当館で最も古い1880（明治13）年製の展示車両

3 「館内貸切」について

前項で紹介した通り、当館では鉄道に関する様々な資料をあらゆる角度から楽しんでいただけるよう工夫を凝らしている。特に実物車両の展示数は国内最多である。これらの展示物を利用して、通常開館時と異なる博物館利用をしていただこう、というのが、現在筆者が担当している業務の一つである「館内貸切」である。

「館内貸切」は「交通科学博物館」「梅小路蒸気機関車館」から当館になって大きく変わった点の一つでもある。かつて両館では、館内を貸

切利用する事例があまり無かったようで、それも映画やドラマの撮影など、商用利用の事例ぐらいである。当館開業後は、一般のお客様に向けた「館内貸切」に関するオーダー表を定め、料金を設定している。その内容は、会議室利用から全館貸切まで数種類を用意しており、当館ウェブページでも告知ページ (<http://www.kyotorailwaymuseum.jp/reserved-use/>) を設けてPRしている。これまで当館で開催された貸切利用の一例をご紹介します。

（１）会議室利用による講演会の開催

当館の会議室において、利用団体主催の講演会を実施。実施後すぐに、講演会の内容を基に当館の展示物を見学いただくことで、さらに理解を深められたとのことであった。鉄道に関する専門的な講演を、鉄道専門の博物館で実施することに意義を感じていただけたようである。

（２）レクリエーション利用等による全館貸切

企業の社員レクリエーションの一環として当館を全館貸切し、社員同士の結束を高めるようなクイズラリーを実施した事例や、企業のキャンペーンの一環として当館を夜間貸切し、ナイトミュージアムとした事例もある。活用法次第で当館で開催する意義が高められることから、今後、新たな活用法が生まれる可能性があると考えられる。

（３）前撮り写真の撮影

当館の展示物を背景に結婚式の前撮り写真を撮影する。開館日に実施しており、閉館後の夜間に撮影している。毎月１～２回の利用がある。人気の場所は扇形車庫や本館３階のスカイテラスだが、撮影希望者は鉄道にこだわりのある方が多く、他にも好みの車両や場所を指定される事がほとんどである。

（４）結婚式の開催

館内で結婚式を挙げる。これまで開催された式は全て、本館１階の「500系新幹線電車」「581系特急形電車」「489系特急形電車」前に会場を特設した。およそ50名のお客様と当館の車両たちから祝福される新郎新婦の姿がとても印象的であった。



写真12 スカイテラスでの前撮り写真撮影



写真13 特設会場のバージンロードを歩く新郎新婦

４ おわりに

ここまで、現在勤務している「京都鉄道博物館」の概要と、そこで模索している「館内貸切」の活用法についてご紹介させていただいた。拙い文章であるのは自覚しているが、少しでも当館に興味を持っていただけたら幸いである。最後に、担当者が描く「館内貸切」の今後について、少し紹介したい。

鉄道ファンのお客様から、「開館中になかなかじっくりと展示物を見るができない」といったお声をいただいたことがあるが、これまで、鉄道ファンのお客様が館内の展示物を見学するためだけの利用法は意外にも無かった。今後は、館内貸切の一つとして、普段なかなか見ることのできない展示物の細部までじっくりと見学できるような鉄道ファンのお客様のための利用法もあれば嬉しく思う。こういった利用法に興味を持つ鉄道ファンのお客様が現れないかと期待している。

５ 謝辞

この度、これまで77号続く「阡陵」の貴重なページを与えていただいたことを、本当に嬉しく思う。お声掛けいただいた関西大学博物館の石立様、山口様、田中様には、改めて御礼申し上げる次第である。

南部靖之氏寄贈の兵馬俑（複製）について

本学校友である株式会社パソナグループ代表の南部靖之氏から、中国秦始皇帝陵の兵馬俑（複製）2体が大学に寄贈された。本学の教育・研究に資する資料として貴重なものである。



図1 兵馬俑（複製）

秦時代（紀元前221～紀元前207）の始皇帝による中国統一がその後の中国文明の発展にきわめて大きな役割を果たした。度量衡、貨幣、文字の統一は中国のみでなく、広く東アジア全体に影響を与えている。その絶大な権力と広大な世界観は始皇帝陵の兵馬俑に象徴されているといえよう。

兵馬俑の俑とは副葬品として死者に奉仕する生身の人間に代えて、木や土等で作った人形のことを指す。そのうち、兵士や馬などをかたどったものを兵馬俑という。始皇帝は秦の王になると（紀元前247）、古来の習慣にならって自らの陵墓の築造工事を始め、同時に副葬品の兵馬俑を制作させた。

兵馬俑を配置する兵馬俑坑は中国陝西省臨潼県驪山の北麓に位置し、省都の西安市から東へ35kmのところにある。1974年3月に発見され、現在も発掘作業が継続されているが、將軍や兵士、馬など等身大の俑が出土し、その配列の密度から兵馬俑全体の数はおよそ8000体とも推定される。

坑は4基あり、発見した順序に基づいて一号坑、二号坑、三号坑、四号坑と名づけられた。俑のある坑はそれぞれ軍構成が異なり、一号坑は

40近くの戦車に指揮される6000人以上の歩兵が主体となり、全体的に四方を横隊でかためた巨大な長方形の軍陣である。それに対して、二号坑は歩兵、車兵、騎兵を組み合わせている。ただ、軍陣の配置になっていないため機動力のある精鋭部隊ではなく、兵士の集まる軍営だと考えられている。後方に位置する三号坑は戦車1輛と66人の歩兵からなり、発見当時は一号坑と二号坑の司令部だと考えられていたが、動物の骨が多数発見されたため、その役割は不明となっている。また、四号坑は兵馬俑が配置されておらず、築造が中断されたものと考えられている。



図2 三号坑



図3 一号坑の横隊

兵馬俑坑から出土する俑は極めて写實的に表現されている。各個体はそれぞれ容貌が個性的なだけでなく、姿勢、髪型、服装、履物などによって



図4 修復中の兵馬俑（一号坑）

歩兵、車兵、騎兵の兵種や、兵士俑と武官俑の階級に分かれている。また、武官俑には上級武官（將軍）、中級武官、下級武官があり、兵士俑と武官俑とも、鎧を着たものもあれば、戦袍のみを着たものもある。さらに、たとえ同じ上級武官であっても、手に持つ兵器の種類によって姿勢がそれぞれ異なる。そのような配置は実

際の軍隊にならったと考えられている。

今回寄贈された2体の兵馬俑（複製）はいずれも鎧を着た武官俑で、上級武官（将軍）俑（図1左側）と中級武官の御者俑（図1右側）である。

そのうち、将軍俑は、左手を軽く握り、右手は何かの兵器を持っている様子で、二号坑内の西南方にある試掘区域から出土した将軍俑と同じポーズをとっている。高さは1.96mで、百万の精兵をもつ将軍ならではの風格が漂う。頭には上級武官のしるしとされるやまどりの尾をかたどった冠（鵠冠）をつけ、体に長い戦袍を2枚重ねて着て、その上に鎧を付けており、胸、背中、両肩に地位を示す紐飾りがある。履物は四角い形をして、つま先が上にそっている。この形のものはつま先が上にそればそれほど位の高さが示される。平穏な表情から経験豊富な将軍に違いないだろう。

将軍俑は始皇帝の兵馬俑の中では、出土が極めて少ない種類であり、およそ8000体のうち、未だ9体しか出土していない。

一方、御者俑は、両手を前へ斜めに伸ばして手綱をとる様子で、一号坑の東端から出土した戦車の横にいる御者俑と同じポーズである。高さは1.88mで、頭に中級武官のしるしとして板状の冠をつけ、あごの下で紐を結んでいる。視線をやや下に向け、車馬に集中しているのだろう。身に戦袍をまとい、鎧をつけ、将軍俑と同じ形の履物をはいているが、つま先は将軍俑のそれほど上にそっていない。

兵馬俑坑から出土する御者俑は兵士俑と一緒に戦車の後ろに立つのが一般的である。1輦の戦車に御者1人が中央にいて、兵士2人が両側につく、という配置である。始皇帝の軍隊における御者は、車馬を御することが主務であるが、主将が負傷した時にその代わりとなって軍隊の進退を指揮する役目も担っているため、きわめて重要な構成部分である。

秦始皇帝陵の兵馬俑坑が位置する陝西省西安市は古称を長安といい、古くは中国古代の諸王朝の都であり、今も中国西部の最大の都市で、交通機関の要衝である。かつてのシルクロードの起点として、周辺には世界遺産や文化遺跡な

どの観光名所が多数あるため、人気の観光地となっている。特に近年中国で人気の大西北（中国の北西方にある陝西省、甘粛省、青海省、ウイグル自治区と内モンゴルの一部を含む地区を指す）の旅行ルートとして外せない場所である。

筆者は2018年の夏にシルクロードを旅して、西安市を訪れた。かつて古都時代の城壁や太鼓楼のある街の風景が今も残されていて、市内に玄奘三蔵ゆかりの大雁塔や景勝の地である華清池、唐の大明宮跡などがあり、歴史感が漂いつつ風光明媚な土地柄である。



図5 秦始皇帝兵馬俑博物館



図6 兵馬俑博物館一号坑

秦始皇帝陵兵馬俑博物館は兵馬俑坑が発見されて3年後の1979年に開館され、一号坑、二号坑、三号坑と文物陳列館からなる。そのうち、一号坑、二号坑、三号坑はほぼ発掘現場そのままの状態

で展示され、文物陳列室では副葬品の銅車馬が展示されている。兵馬俑坑以外に、2011年から新たに文吏俑坑、百戲俑（舞踊、格闘、雑技など宮廷娯楽の俑）坑、石鎧甲坑、青銅水禽坑が公開されている。

寄贈いただいた兵馬俑（複製）は現在千里山キャンパスの100周年記念会館3階エントランスロビーに展示され、来館者はどなたでも観覧することが可能である。

参考文献：

- 1、秦始皇兵馬俑博物館編、1999年、『秦始皇兵馬俑博物館』、文物出版社。
- 2、秦始皇兵馬俑博物院ホームページ「考古発掘」
http://www.bmy.com.cn/2015new/channels/500_2.html、2019年2月1日閲覧

図版出典：

- 図1 関西大学教育後援会提供
図2～6 筆者撮影

関西大学博物館学芸員

◆ 博物館だより

◇2018年度秋季企画展「絵本の小道を歩いてみるとー石原敏子の本棚からー」を9月3日から29日まで開催しました。24日には関西大学名誉教授 石原敏子氏を講師にお迎えし、講演会「絵本の変装／変奏ー変わること／変わらないものー」も開催し、たくさんの方にお越しいただきました。会期中は681名の方にご来場いただき、普段なかなか目にすることのない世界の絵本を、皆さん興味津々な様子で、ご覧になっていました。

◇11月11日から16日まで博物館実習展を開催しました。今年度は49名の実習生が「HAKOー20世紀以降における文房具としてのハコー」、「食いだおれー近世から現代へー」、「畏れの姿ー江戸時代の人々の視点ー」、「茨木の潜伏キリシタンーザビエル像発見のエピソードー」の4班に分かれ、博物館学課程の集大成として展示を構成しました。

また、特別展示「能勢槻峯寺とその建立修行縁起」を同時開催し、有志によって作られた『槻峯寺建立修行縁起絵巻』の複製品の展示を中心に、地域の遺跡保存と文化財の活用の取り組みを紹介しました。会期中には456名の方にご覧いただきました。



◇2018年度冬季企画展として「関西大学とアーティストのミュオグラフィアート展ー先端科学をアートで表現ー」を12月3日から2019年1月12日まで開催し、860名の方にお越しいただきました。12月8日に開催した講演会の参加者は、26名でした。

◇2018年度冬季テーマ展として、2019年1月28日から2月28日まで「関西大学と村野藤吾 設計図・建築写真・絵画」を、冬季ミニテーマ展として「瓦経展」を同時開催し、315名の方にご覧いただきました。2月13日には「瓦経展」のギャラリートークも開催しました。

◇本年度下半期、関西大学教育後援会有志から、米国ビクター社製のアウトサイドホーン蓄音機と、付属の10インチSPレコード20枚を寄贈いただきました。この蓄音機は、1909（明治42）年製の4型と呼ばれるモデルで、1901（明治34）年に最初のモデルが発表されました。その後、改良が加えられながら1927（昭和2）年まで販売されたロングセラーモデルでもあります。その中でも本機種は1905（明治38）年に最初のモデルが発表されたタイプMと呼ばれるものです。朝顔型のホーンで、2丁ゼンマイを内蔵しており安定した演奏を楽しめます。

博物館では、定期的に「蓄音機で聴く SPレコード演奏会」を開催し、蓄音機の奏でる音色を来館者の方々に楽しんでいただいています。



「蓄音機で聴く SPレコード演奏会」の様子

．．． 編集後記 ．．．

表紙は、本館所蔵の岩手県気仙郡綾里村（現大船渡市三陸町綾里）で出土した縄文時代のイノシシの牙製装飾品です。イノシシの牙を半裁して丁寧に磨いて整形し、基部付近には3つの孔を穿っています。孔があけられていることから、垂飾（ペンダント）か、あるいは本来2本1対で孔に紐などを通して連結させ、腕輪として身に着けていたものと考えられます。

2019年度春季企画展「徳山喜昭コレクション展 高札をみる、よむ」を4月1日～5月19日まで開催します。本学の理事・評議員を務めた校友の故徳山喜昭氏が蒐集した、江戸時代から明治時代初期までの高札約30点を中心に展示します。



（裏面）